

『家のない少女たち』

著者 鈴木大介氏にインタビュー

—この本には現代の家出少女たちが数多く登場します。こうした少女は増えているのでしょうか？

2000年代初頭に「プチ家出」という言葉が生まれました。そういう言葉でくくられる少女は04年以降、カラオケボックスの深夜利用規制などで明らかに減りました。一方、家庭環境からの避難としての「本気家出」はいつの時代も一定数あると思いますが、不景気のため、このころ増えているかもしれません。

—家族から深刻な虐待を受けた末に家を出し、生きるために売春をしていくといった過程が生々しく描かれています。こういう子たちと、どうやってコミュニケーションを取るんですか？

話すときに気をつけるのは、絶対に否定しないこと。すこいね、よく頑張ってるねともかく肯定します。そして、話したいことをすべて聞いてあげる。虚実混在していることもあり、「ママはモデルで、パパはパティシエ…」といった、どう考えても作り話と思えるような話も疑うそぶりを見せず、最後まで聞きます。そうして2時間でも1カ月でも、話したいだけ話してもらおう。全部出し切ると、「いや、実は…」と、ようやく本音や真実を語り出す。忍耐強さが必要ですね。

—そんな彼女たちを「生まれついで被害者」と書いています。そのとおりだと思いますが、そう見ていない人たちが世の中には多いと感じませんか？

ええ、それはとても残念なことですが、でも難しいのは、彼女たちは「見」救済の

『家のない少女たち』
10代家出少女18人の壮絶な性と生
宝島SUGOI文庫 480円



「二十歳になったら、生命保険入って死んでくれる？」と実の親に宣告されたり、想像を絶する虐待を受けて家を棄て、売春組織などで過酷な生活を強いられる家出少女たち。日本のストリートチルドレンであり、失われゆく家庭の墓標ともいえる彼女たちの衝撃的な生き様を、7年間に延べ100人の家出少女を取材した著者がルポ。(2010年10月初版発行)

ておく必要があるでしょう。

—家のない少女や少年たちをなぜ取材し続けるのですか？

90年代に援助交際などを「自己選択」的なムーブメントとしてとらえる風潮がありました。私は失礼な話だと思っていました。そういう問題の根底にあるのは、常に「貧困」だからです。

—そういう子からちゃんと話を聞き、まともに論じる筆者がいないと感じていたので、ならば自分がと。私も子どものころ、話を聞いてくれる大人が欲しかったせいもありますが、そういう子たちも話を聞いてくれる大人に飢えています。だからホストにはまったりするのですが、

—学校の先生に期待することは？

家庭環境がひどい生徒がいても、先生がそれを变えることはできないでしょう。でも高校を卒業後、生徒がそこから脱出し、自立できるよう親身に進路の相談に乗ってほしいのです。そのとき正論を言わないでください。キャバ嬢になりたい、ホストになりたいという生徒に、「そんなのは進路じゃない」と言わないでください。それを言ったら、生徒は二度と本音で話すことはないでしょう。「あなたがおっしゃるようになってみなさい」というくらい懐を深くもってほしいです。

鈴木大介氏

すぎき・だいすけ●1973年生まれ。編集・ジャーナリスト系専門学校を卒業後、編集プロダクションに就職。27歳で独立。「犯罪をする側の論理」をテーマに、裏社会・触法少年少女らの生きる現場を中心に取材活動を続けるルポライター。著作に、福祉の届かない現代日本の最底辺の家庭像を描いた『出会い系のシングルマザーたち』（朝日新聞出版）、家族や地域から取り残され・虐げられ、居場所を失って犯罪に走る少年たちを描いた『家のない少年たち』（太田出版）がある。